
とある魔道師と幻想殺し

Taciturn fraud

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔道師と幻想殺し

【ΖΖコード】

Ζ3344X

【作者名】

Taciturn fraud

【あらすじ】

何も、こんな悲劇的な結末じゃなくても良いはずだ。そいつを食い止めるために、戦つたつていよいよだ。上条当麻の活躍で第三次世界大戦が終わり、平和な日常が始まっていた…しかしそこに上条当麻はいない

なぜなら、上条当麻は未来に行っていたから?上条当麻が目を覚ました場所はミッドチルダという魔術ではなく魔法が使われているところだった!?機動六課の訓練所に落ちた上条は事件に関わることになつて…

幻想殺しと魔道師が交差する時、物語は始まる

プロローグ（前書き）

一応この作品が僕の処女作です。面白くないかもしれませんのが読んでくれるとうれしいです！また、間違いやおかしな点があれば言ってくれると幸いです

プロローグ

何も、こんな悲劇的な結末じゃなくても良いはずだ。
そいつを食い止めるために、戦つたつていいはずだ。

この時、一つの影が最短距離で激突した。

右手に《幻想殺し》を持つ男、上条当麻と暴走した大天使、ミーシヤ＝クロイツェフは

激突した。

《幻想殺し》を使いミーシャ＝クロイツェフを消したその瞬間！
彼、上条当麻の体を光り輝いた何かが包み込んだ。

……一方その頃、とある訓練所では…

「次の一撃で終わりにしましょう…！」

「いいよ、全力全開で返り討ちにしてあげる！」

青色の髪をした少女が呼びかけると、橙色の髪のツインテールの女性が答える

「「ティバイーン」」

この時、彼女達はまだ気づいていない。

上空で意識がないシンシン頭の男が落ちてきている」と…

「「バスター！！」」

桃色の光線と水色の光線が衝突しそうな時に、
間にに入るよう、シンシン頭の男が落ちてくる…

「「えつ！？」」

「ぐはっ」

光線は見事に男に直撃した。もちろん意識はないので、そのまま男は、海に落ちた。

こんな時、彼ならこういつだらつ「不幸だああ！」…と

この時、それを見ていたメンバーがあわてて彼を助けに行つたのは
別の話である…

上条当麻と魔道師が交差する時、物語は始まる…

出会い

上条は、体中にする痛みで目が覚めた

上条「……ここは？」

？「あつ、起きたのね！」

声のする方を見ると、髪が金色の女性が「」たちを見ていた

上条「ここは何処ですか？」

？「」はミツドチルダよ

ミツドチルダ？聞いたことがない名前だ…

そんなことを考えていると、急にドアが開き

「シャマル、彼の目が覚めたつて本当…？」と言しながら橙色の髪

をした女性が入ってきた

あの髪が金色の女性は、シャマルつていうのか…

橙色の髪をした人が「」たちに来る

「体は大丈夫？」

上条「ああ…大丈夫ですよ…慣れてますから…それよりえーっと

…」

「あつ自己紹介がまだだつたね、私、高町なのは…君は？」

上条「おれは、上条当麻つす、それより聞きたいことがあるんですね

けど…」

なのは「なに？」（上条当麻？どつかで聞いたような…）

俺が聞きたいことは一つしかない

上条「第三次世界大戦は？」

なのは「なに言つてゐるの？4年前に終わつたじゃない？」

えつ4年前？

上条「それじゃあ学園都市は？」

なのは「君、大丈夫？それも4年前に壊滅したじゃない…」

何がなんなか全くわからない…学園都市が壊滅？

高町が心配そうな目でこちらを見ている

上条（警戒されてしまつたか？）

上条「な、な～んてな！『冗談だよー』」

なのは「なりいいけど

」

上条「わざわざありがとうございました。それじゃあ「まつて！」
ガシッ？」

上条「どうじたんでせうか？」

なのは「いちの質問にも答えて…なんで空から落ちてきたの？」

上条「はい？上条さんですか？」

なのは「うん、落ちて来たよ？」

上条「そんな訳ないでしょ、では上条さんは「れにて…痛ッ」ぐ
らつ

なのは「えつ！？」ぼふつ

？「彼が田を覚ましたって本て！？…なのが押し倒されて…」
上条さんの不幸は健在です

？「なるほど…なのが押し倒された訳ではないこと言つことだね…」
なのは「何度もそう言つてるでしょフェイティちゃん…」

なのフェイ「…で君は何処に行こうとしてるのかな？」

上条「ギクウ！？なつ何のことでしょうか？」

フェイト「さつきから一歩ずつドアに近づいて行つてるでしょう」

なのは「見てないと思つたら大間違いだよ…傷だつて治つてない
のに」

上条「だつてここに居たら迷惑がかかりそつなんで…そつこう事で

…！」

なのは「バインドをせてもりつたよ

上条「これは魔術でせうか？」

フェイト「正確には魔法だけどね…」

ニヤア上条「それを聞いて安心しました」バキンッ

なのは「バインドが

フェイト「碎けた？」

上条「それでは、サヨナラあ「ダッ

なのフェイ「……えつ！？」

なのは「ハツ追つよフェイトちゃん！」

フェイト「うつうと」

なのは「レイジングハート」

フェイト「バルティッシュ」

なのフェイ「セートアップ」

シャマル「なに」とよ全く……」

その時、訓練所では……

「そう落ちこむなよスバル」

スバル「だつてヴィータ副隊長！当てたんですよ私のツンツン頭の人に全力で……」

ヴィータ「生きてるんだから良いだろ……なのはの全力もくらつてな……」

上条「助けて～」

ヴィータ「……ピンピンしてるぞアイツ」

スバル「……ですね……つて追つかけているの隊長達じゃないですか！」

なのは「ヴィータちゃん、スバルとティアナ」

フェイト「エリオとキャラ、シグナム」

「「「「はつはい！」」」

なのフェイ「そいつを捕まえて！」

なのは「多少の攻撃はしても良いから」

一同「はい！」

上条「ああ～不幸だああ～」

避けるのは得意なんです

ヴィータ「行くぞアイゼン！死ねええ！」ブンッ
上条「危なねえつ！」

ヴィータ「チツ外したか…行けえスバル、ティアナ…」「はいっ！！」

ティアナ「シユートバレット…！」バンッ
ティアナ「今よスバル」

スバル「うん…！」

上条「挟み撃ちかよ！？よけにや死ぬわ！」

スバル「今だエリオ」

エリオ「わかつてます！」

上条「今度は突っ込んできた！？ヤベエ」タツ

エリオ「飛び越えたなんて…」

キヤロ「フリード！」ボツ

上条「これは避けれるぜ」

シグナム「紫電一閃！」

上条「それガチ技じやねえか！」

シグナム（もらつた！）キュイーン

一同「「「！」」

エリオ「技を消した！？」

上条「やつたゼ！」

この時、彼は気づかなかつた。

足元に空き缶があることを…

上条「ええ、不幸だあ」ドテン

なのは「覚悟は」

フェイト「できてるよね」

上条「ヒィィイ」

シグナム「ちよつと待て、提案が一つあるんだが…」

フェイト「なに?」

シグナム「一対一の模擬戦をしたらいだらうか」

なのは「…そうだね、そうしようか」

上条「ハア～不幸だ…じゃあ俺が勝つたら勝手にさせてくれよ?」

フェイト「良いよ、負けないから」

なのは「ただしこっちが勝つたらおとなしく医療室に戻つてね」

上条「わかってるよ」

フェイト「先に私がいくね、なのは」

なのは「頼んだよフェイトちゃん!」

上条当麻／SATORU（前書き）

戦闘シーンは得意じゃありませんっ！…とこつ訳であまり期待しないでください

上条当麻 vs フェイト

模擬戦場

フェイト「最初から本気でいいよ」

上条「いいぜ、かつてこい」

フェイト「インパルスフォーム」

一同（あつあの人死んだ）

上条「お互に1ヒット受けたら負けな」

フェイト「わかった」（速攻で終わらせて早く医務室に連れてってあげなきゃ）

なのは「模擬戦開始！」

フェイト「行くよーー！」 フュン

上条「速い！」

フェイト（後ろがとれた！）「私の勝ちだあ！」

上条「それは気が早いんじゃねーの？」ひょい

一同（あの状況で避けた！？）

フェイト「…なんでの状況で避けれるのに攻撃してこないの？」

上条「だつてあんた手加減してるだろ？」

フェイト「…なんでわかったの？」

上条「だつてその武器を縦にしてきただろ」

上条「本気でするならその武器で俺をブツ飛ばせたはずだったからな」

フェイト「…？」（この人、あの一瞬でそこまで…）

上条「来るなら本気で来ないと、お前負けるぞ？」

フェイト「そう、みたいだね…」

上条（まあかなりビビったんですね～）

フェイト「いくよー」 ダッ

ヴィータ「あいつかなり強いな」

シグナム「ああ一度は手合せしたいものだな」

ティアナ「ど、どんだけ強いのよ」

スバル「最初の速度でも私達かわせないのにね…」

ティアナ「あの人、何をしている人なんだろうね」

スバル「後で聞いてみようよ」

ティアナ「そうね…フェイト隊長が勝てばの話だけど…」

もう少しで勝敗が決まる…

上条「やつぱり早いですね」

フェイト「全部の攻撃をかわしてるのがよく言つね」

上条「これじゃあ決着なんてつく訳ねえよ…」

フェイト「次の一撃でラストにするよ」

上条「わかった、次の一撃で終わりにしよう…」

フェイト「勝つのは私だ！！」ヒュン

フェイトが一瞬で上条の後ろまで行く

フェイト「もらつた！」

上条「悪いがあんたよりも早い奴と戦つた事があるんでね…」

上条は完璧に^{アイツ}読んでいた。

一同（あの人のかちだ！！）

そう、この勝負は上条がかつはずだった。…そのまま拳を出していれば

上条（あれ、この服装ってたぶん魔力でできるよな？

それを右手で触つたらアーニーゼのように…！？）

そんな事を思つてしまつたが最後、上条は出していた拳を止めた。

その後、左手を出そうとしたが間に合つはずがない

上条の体がきれいに飛んで行つた

フェイト「勝つたの？」

シグナム「いや、試合に勝つて勝負に負けたという所だろ？」

フェイト「やつぱり…っていうか怪我人相手に本気で攻撃しちゃつたよ」タツ

シグナム「あれで怪我をしているのか…」

ヴィータ「味方にしておきてえな」

シグナム「まつたくだな」

エリオ「すごい…」

キャロ「うん、あの状態のフロイトさんに勝ちやがりになるなんて…」

一同「「「あの人と戦つてみたいな…」」」

質問攻め

上条「ここは確か医務室だつたような…」

シャマル「あつ目が覚めたのねー皆に連絡するからちょっと待つてねー」

シャマルさんが皆に連絡しに行つたようだ

上条「負けたのか…まつ、仕方がないか」

?「お前は強いらしいな」

上条「うわつ犬がしゃべつた！？」

?「犬ではなくオオカミだ、それにザフイーラという名があるぞ上条当麻」

上条「そうか、それは悪かつたなザフイーラ」

ザフイーラ「やけに物わかりがいいな」

上条「なんかもう慣れた」

ザフイーラ「そうか…」

ザフイーラとの会話が終わるとドアが開き9人程入つてくる

上条「どうしたんだ大勢でこんなところに…もう上条さんは逃げませんよー」

ティアナ「あの、上条当麻さん」

上条「ん？」

スバル「私たちに稽古をつけてくれませんか？」

上条「ハアなんで俺なんかに？」

エリオ「フェイトさんとの模擬戦を見て思つたんです」

キヤロ「この人強いなつて」

上条「なんでオレ負けたじやん」

フェイト「勝てるはずの所で攻撃を止めたからね」

上条「ギックウー！な、何のことか全くわかりませんなあ」ダラダラはやて「シグナムから聞いたでえーあんたわざと負けたんやつてな

あ

上条「誰がわざと負けるか！？」

ヴィータ「ならなんでアッコで殴りきらなかつたんだよ？」

上条「あれは、フロイトさんの事をおもつてだなあ…ハッ」

シグナム「何故テスタークッサを思つて殴らないんだ？」

上条「えつと…そ、そつ顔面を殴つちやいけないかなあつて」

なのは「嘘は良いから正直に答えなさい！」

上条「だあ…明日だ、明日全部説明するから」

はやて「ホントやううね…シャマル」

シャマル「わかつてますよ、一歩も出しませんよ」

上条「」

なのは「じゃあ明日訓練所で全部説明してもらおう」

フロイト「そりゃう、今日はもう疲れたし」

上条「不幸だ…じゃあ交換条件で学園都市の事を情報としてくれよ」

なのは「わかつたよ、第三次世界大戦についても調べておくれよ」

上条「ありがと、高町さん」

なのは「な・の・はつて呼んで」

上条「じゃあ、ありがとうなのは」キリッ

なのは「ど、どひこたしまして」

その夜

なのは「上条君の為に頑張り」

上条「疲れたな…寝よう」

翌日、訓練所

はやて「さあて説明してもらおうか」

上条「その前に…なのは…」

なのは「ふえ、な、なに？」

上条「資料を見せてくれないか？」

フロイト「いいんじゃない？なのは…まだ皆来てないし…」

なのは「そうだね、ハイこれ」

上条「ありがとう、逃げないから安心しない」

上条は資料に目を通して絶望した

スバル「すみません、待たせちゃって」

上条「ハハツアハハハハツ」

なのは「か、上条君?」

上条「ありがとう、なのは凄くわかりやすかったよ
はやて「…説明してもらおうか…」

幻想殺しの話、そして…（前書き）

更新が遅くなってしまったスミマセン…
…ネタが浮かばなかつたので、オリキャラを出してみました！

幻想殺しの話、そして…

上条「そうだな、まず昨日殴らなかつた理由からいくか」
上条「俺の右手には《幻想殺し》という力がついてい」
一同「《幻想殺し》？」

上条「そう、この右手で触れれば異能の力なら全て消せるんだ」
フェイト「じゃあ、あの時上条さんが私を殴つていれば魔力ででき

て「る…」

上条「あの服は消える」

「つまり負けた上に素っ裸つて」とだ」

ヴィータ「でも信じられねえよ《幻想殺し》なんて」

上条「そういうだらうと思つたよ、だからなのは！」

なのは「なに？」

上条「俺に向けて一発魔法を出してくれ」
なのは「うん、いいよ」ポツ

上条「よく見ておけよ…」キューイン

一同「本当に消した…？」

フェイト「上条君ありがと」

上条「いや、大したことないさ…これが殴らなかつた理由だ」
一同「なるほど」

はやて「…まだあるやろ、説明すること」

上条「ああ、それは俺が落ちてきた原因と俺のこれまで…かな」
一同「原因？」

上条「あくまで仮説だがな…」

ティアナ「原因ってなんですか？」

上条「実は俺さ今この時代にいやダメなんだよ」

一同「…？」

上条「まずは第三次世界大戦について詳しく述べ説明しようかな」

「第三次世界大戦はどういう風に聞いた？」

フェイド「確かに学園都市とロシア側の宗教の対立にイギリスが割つて入つたつて感じだよ」

上条「表向きはそくなつてているのか…」

エリオ「表向き？」

シグナム「裏があるみたいな言い方だな」

上条「みたい、じゃなくて裏があるんだ」

「あれは一人の男が世界を救いたくて起こした事なんだよ」

ヴィータ「どうして世界を救いたくて戦争を起こすんだよ…」

上条「ああ間違つている、だからそんな幻想は殺してやつたのさ」

キヤロ「じゃあ戦争を止めたのは上条さんなんですか？！」

上条「そんなスゴイ事はしてないしな」

「そもそも俺の右手が原因だつたしな…」

「…」

「…」「それは良いことを聞かせてもらつたな」

一同「「「？」」」

声のする方を見ると、ひとりの男性が空を飛んでいた…

ヴィータ「何者だテメエ…！」

？「私はゴルダーだ、覚えておけ…生きていればな」ニヤツ

フェイド「来るよ！」

フェイドがそういうと皆がバリアジャケットをまとう

ゴルダー「私が彼の右手だけだよ、だから…動くな」

ゴルダーがそういうと全員、一步も動けなくなる

上条「これは…『黄金錬成』？！」

ゴルダー「ほお～わかる奴がいるとは驚きだな」

上条「なんでお前がこの術を…」

ゴルダー「錬金術について学んでいたらこうなつたのさ」

上条は右手に全ての力を加え自分の体に触れる

すると高い音が鳴り、動けるようになる
ゴルダー「まだまだ勝負はこれからだよ...」

激突（前書き）

最近投稿のペースが遅れてる気がするので、気を付けていきたいと思^います

動けない人全員を触れるわけもなく、自然と一対一になる

上条「…お前の目的は何なんだ！？」

ゴルダー「俺はこの力を使い世界を我が物にする」

上条は思う

こいつはアイツと同じ間違いをしていやがる！

はやて「そんな事できるわけないやろーアンタなんかに」

ゴルダー「？なんか だとお！」

ゴルダー「…決めたお前から殺す…」

上条はこの光景にデジヤブを覚える、それを気づいた瞬間走り出す

ゴルダー「…？死ね」

そう言われた瞬間、体が揺らぎ前に向かって電池が切れたように倒された

「――――はやて（ちゃん）――」「――――」

上条「はやてええええええええ！」

上条は全速力ではやての元に行き右手で抱きかかえる
すると微かに息をしている音がするので安心する
それと同時に怒りも覚えている

上条「アンタが何の躊躇もなく人を殺しても良いと思つてはいるなら

まずは、そのふざけた幻想をぶち殺す！…」

それがなのは達が最初に見た上条当麻の本気の殺氣だった

ゴルダー「？感電死」

ゴルダーがそういうと雷が上条の方へ向かっていく

上条は右手を前に出しその雷を消す

ゴルダー「なるほど魔術では消されてしまうか…」

上条（もうバレた！？）

ゴルダー「それなら…」

ゴルダー「？左手に銃、右手に剣 そして最後に？動くな」

上条「しまつ」

上条はさつきの全力疾走で先程までの力は出ない
そしてゴルダーは一步ずつ確実にこちらに近づいてくる

スバル「上条さん逃げて！」

ゴルダー「右手は頂いていく！」 サツ

音はない、ゴルダーが右手を振った瞬間、上条の右腕が肩口から切
断された

激突（後書き）

能力を『黄金鍊金』にしたのは、一番はじめに思い浮かんだからです。

：展開が速いので気をつけていきたいと思います！

切られた感覚はなかつた

ヰヤローウヰヤ万!!

ギャロの呟き声が自分の意識を保たせる

「二ノ河がこれで縛れりか」

止発の二物か物かのアザリ、ヒヌイツ

上条のこめがみから「ホリ」とヘイシチのセリ。轟れる音が聞こえた
上条「あはははははははははははははははははははははははははははは
ははははははは シー！」

入れる

「ルタ」は後方3メートルのあたりまで吹き飛んだ。

「ゴルダ」（なぜだ、阿故）の状況で笑つて、られる？）

『不快』は次第に『不安』に代わっていく

上条「どうした？殺してみるよ」

「せめてこいつたまゝ立つてゐるが……」

ゴルダ一「：右手に暗器銃、弾は一発で十分！」

「アーヴィングの本を買おう。」

目に見えない速さの弾が上条のストレスをとおつていいく

（なぜか、何故か、なぜか、何故か）

しだいに『不安』は、大きな『恐怖』へと変わっていく。

今まで考えもしなかつた相手の正体を考え出す

上条「おい」

突然声を出されてゴルダーは体をビクリ、と震わす
上条「まさか、この程度で俺の『幻想殺し』を潰せるとか思つたん
じゃねえだらうなア？」

右肩から先は切られてしまつてないはずなのに、
もう氣絶しても、おかしくないほどの血液が流れているのに……

上条は心底楽しそうに笑う

ゴルダー「なんなんだ！ それはっ！？」
それ、ゴルダーの目線の先あるものは……
上条の右腕の断面から一メートルを超すほどの大に強大な、竜王
の顎
それでも竜王の顎で頭から飲み込もうとすると……

動きが止まつた

ゴルダーはすでに恐怖から氣を失つていた
上条が自分の左手で竜王の顎を押さえていた
上条「お前は……出でくるな！！」
上条が左手で竜王の顎を潰すと切られたはずの右腕があつた……
「後は頼んだ……」そう言つと上条は
電池の切れた人形のようにその場に倒れた
皆は呆然としていた

訳のわからないことが多いすぎる……

フェイント「ハツなのは一医務室に運ばなきや」
なのは「そ、そうだね！ 皆運ぶのを手伝つて」
一同は、モヤモヤとした想いを胸に秘めながら
はやてと上条を一人を医務室へ運んだ

フォアード陣隊長会議（前書き）

遅くなつてスミマセン！

よくわからない描写が入つてますが、後々必要になりますので頭の片隅に入れておいてください

フォアード陣隊長会議

上条を医務室に運んだ後、フォアード隊長陣は集まって今日の事について話し合っていた

フェイト「…それにしても、最後の?アレは何なんだろう?」

?アレ すなわちゴルダーが上条の右腕を切断した時に出てきた禍々しい顎

その正体は上条自身にもわかつていない

なのは「あの顎はわからないけど、あの時の上条君は凄く怖かったよね…」

なのはの一言に頷く一同

ヴィータ「まあ後でアイツに聞けば良いだろ…」

フェイト「…それよりも気になることがあるんだ」

シグナム「ゴルガーとやらが使つた『黄金鍊成』、か」

フェイト「はい…」

なのは「確かに私達の使うものとは違つた雰囲気がしたね」
ヴィータ「ああ、言つたことが本当に起きるなんて今でも信じられねえぜ」

なのは「ホントに動けなくなっちゃつたもんね」

シグナム「…それに、あと少しで主はやが死んでしまう所だった」

「…」

?死ね その一言で本当に人が死んでしまう所だった
しかも自分たちにとつて大切な人が

ヴィータ「…あいつには感謝しねえとな」

他の3人も口には出さないが思つてている事は同じである

なのは「やっぱり上条君は良い人だね…」――「」

ヴィータ「だなつ！」――

ああ、どうしてこの一人はこうも単純なんだろ?…と思わざるを得

なかつたフェイトとシグナムだった

真っ黒な暗闇の中、一人の青年上条当麻は歩いていた

前後左右、上も下もわからない空間の中をひたすら歩いていた

そんな気味の悪い空間の最深部、上条はたった一枚の扉を見つけた

扉の周りには決して綺麗とは言えない光が帯びていた

恐る恐る扉の方へ向かっていく

周りが見えない上条は後ろの地面が無くなり奈落の底に変化している事に気づいていない

上条が扉にそつと触れる

キューーン

反応するはずのない右手が何故か反応した

ゴロゴロゴロゴロ

突如開かれた扉により、上条は奈落の底へと落ちて行つた

フォアード陣隊長会議（後書き）

スミマセン、これから期末テストがあるのでテスト勉強の為少し更新が遅れます

案内（前書き）

やっと終わった、魔の期末テスト！…とこいつ訳でこれから通常通り頑張っていきます！

上条が田を覚ますと、もう見慣れた天井があつた
 上条「医務室か……といつか布団がやけに重いような…ブツ？！」
 あたりを見回すと「ゴルダーとの戦いを見ていた全員がベッドを囲んで寝ていた

ティアナ「ん…田が覚めちゃいましたか」

上条「ああ起こしたかワリイ」

ティアナ「いえ、大丈夫です。上条さんの方こそ大丈夫ですか？」

上条「ああ大したことないぞ！…つていうか上条さんはやめてくれないか？」

ティアナ「じゃあどう呼べば…」

上条「呼び捨てか、当麻で良いよ」

ティアナ「ええ！悪いですよソレは」

上条「ん~じゃあ“上条”って呼び捨てでいいよ」

「後、敬語は禁止ね」

ティアナ「…わかりま…わかつたわ。上条」//

はやて「どうしたんや、騒がしいでえ」

騒いでいたせいが次に、はやてが起きたようだ

上条「おはよう、はやて」キリッ

はやて「お、おはよう」//

上条「ほら皆お起きよ」ゆわゆわ

なのは「ふえ、あつおはよう」

上条「ああ、おはよう」

なのは「…て、もうすぐ訓練の時間じゃない…皆こくよ…」

一同「「「「は、はい」」」」

なのは達は、凄く慌てた様子で訓練所に向かっていった

上条「ふう皆行つたか…」

はやて「まだ、あるよ…」

上条「うおっビックリした……どうしたんだ一人だけ残つて
はやて「言いたいことがあつてな」

上条「言いたいこと?」

はやて「うん、あのな 私を助けてくれてありがとう…」
上条「上条さんは人として当たり前のことをしただけですよ~」
はやて「でも、ありがとな…なんかお礼させてくれへん?」
上条「上条さんは、お礼目的でした訳じやないんですよ~」
はやて「うちがしたいんや…何がいい? 今日一日あいどるでえ~」
上条「じゃあ口々を案内してもらおうかな」
はやて「そんなんでエエんか?」

上条「ああ頼むよ…」

別にお礼などしてもらはなくとも良いのだが、それでははやてが満足しないので

しぶしぶ頼むことにした

はやて「じゃあ行こうか?」

上条「オウ! つこでこきますよ姫」

はやて「それじゃあ、探検ヘレッジゴーや…」

はやて「リノが食堂やで」

上条「へえ~ずいぶん広いんだな…」

? 「はやてちや~ん」

声のした方を向くと、小さい人形のよつな人がフワフワと飛んできていた

上条「なんかちや~いのが飛んできたでせ? よ?」

? 「ちや~いとは失礼するです! 私はリイン・フォース? です!

上条当麻さん

上条「? なんで俺の名前を…?」

リイン「それは昨日はやてちや~んがずつと

はやて「わあ~!~言つたらあかんよ~」

上条「はやてがどうかしたのか?」

はやて「な、なんもあらへんよ……」

上条「そつか…困ったことがあつたら相談しろよ?力になるから」

はやて「了解やつ……！」

リイン「それじゃあ私は仕事があるんで……せうばです」

上条「じゃあな」

はやて「ここは知つての通り、訓練所や」

上条「ゲッ俺の血が床についてる……」

床にはゴルガーとの戦いで散つてしまつた血がこびりついていた

なのは「はやてちゃんに上条君…どうしたの?」

なのはが上条たちに気付いたのか、小走りで近づいてきた

上条「俺が頼んでココを案内してもらつてるんだ」

なのは「そなんだ……」(私に言えば案内してあげたのに…)

なのはが悶々としている事を知らないで、上条は他のメンバーと一緒にいる

上条「…それより訓練はしなくても良いのか?」

そういうえば…、と思いそれぞれが、なのはの方を見る

なのは「…それじゃあ訓練を始めようか……」

上条(あれ? 何かなのはキレてないか?)

自分自身のせいだとは思つていない上条は、己の不幸センサーがビンビンな事に恐怖していた

いつも通りの不幸（前書き）

書き方を変えてみたら？という感想が来ていたので、思い切って変えてみました！思ったよりも難しいですね。どちらが良かつたか、感想よろしくお願ひします！！

いつも通りの不幸

「それじゃあ訓練を始めようか……」と、額に青筋を立てているのはが言った

ちなみに、今彼女は女性がしてはならないだろつと思われる顔をしている

「…………」

フォワード陣は恐怖で返事をえもできな「」

「……あれ、返事は？」

その一言でフォワード陣がビクウ、とする

「…………」

今日は皆、大変そだなあ」とか呑氣な」とを思つて居る上条だが彼の不幸センサーが不発に終わるなど

「……では今日はヴィータ副隊長とシグナム副隊長の「コンビ対いつものメンバー + 上条君でしてもらいます。1ヒットでもしたらその人は負けね」

あるはずなかつたのだ！

「……えつ！何でおれが？しかもオレ怪我人なんですけど！？」

意味が分からないと言つた様子で、なのはに言い返す

「何か文句でも……？」なのはが上条に向かつてギラツ、と視線を向ける

「イエ、ナンデモゴザイマセン！」

上条の意見が通る筈もなく、撃沈した

「で、でも俺、右手で触れないんだけど……」

それって不利だろ？と少し困つたふうに言つ

そこで、はやてが一言ニヤついたふうに言つ

「ええやん触れば？脱がせ、脱がせ……」

「それはダメだろ！」

「軍手ならあるよ～」

……結局なのはが見つけた軍手で解決してしまった

「なあ上条君？その軍手貸してくれへん？」と、はやてが言つてきたので訓練が始まるまで貸すことにして

模擬戦開始！（前書き）

この書き方でこれからも頑張っていきたいと思します
感想もよろしくお願いします！！

模擬戦開始！

作戦会議を始めた中で上条はスバルとティアナに作戦の内容を話した

「ヨシツ作戦は

で行くぞ！」

「えつ、ええ～！？」

「やつてみようぜ！」

上条の作戦を聞き

「面白そうだね、その作戦！..」と若干興奮気味のスバル

そんなスバルの様子を見て

「とりあえずやってみましょうか…」と呆れた風に言つティアナ

「そろそろ始めてもいいかなあ～？」

なのはが、こちらの様子をうかがつようつに聞いてきた

「ああ良いぜ！」

「それじゃあ開始！」

開始の合図を聞き、上条がゆっくりとシグナムの方へ行く

「前線に出てきてやつたぜ」

「それはありがたいな…」

バトルマニアのシグナムからすればフェイトに勝ちそつになつた相手をするのが嬉しいのだろう

よく見ると顔が笑つている

「手加減なしでいいぜ」

「最初からそのつもりだ！」

上条の発言により二人の戦いが始まった

「あぶねえ！」

怪我のせいで、ギリギリで躲すことしかできないが確実に防御をしている上条

そして、その様子を見てシグナムは上条が怪我人だということを忘れ攻撃している

だが、その様子を見て不敵な笑みを浮かべる人物がこう言った

「脱がせ！脱がせ！」

……これから降りかかる不幸を上条はまだ知らない

謎の作戦

上条とシグナムが戦つて いる時スバルとヴィータもお互い向かい合つていた

「…で私には二人か…」

「当麻さんの作戦ですから！」

自信があるのか、胸を張つて言うスバル

「ずいぶん甘く見られたな私も…」

「小っちゃいからじゃないですか？」

バカにするような口調でヴィータを挑発するスバル

ブツンッ

その時、何がが切れた音がした

「…スバル、お前は言つてはならないことを口にしたな」

「ヤバッつい口が滑つて」

この期に及んで挑発を続けるスバル

「ワタシ、オマエユルサナイ！」

「何故にカタコト…？」

スバルの挑発による模擬戦といつ名の追いかけっこが始まった

その様子を遠くから眺めているライトニング部隊は…

「キレましたねヴィータ副隊長…」

「背の事は禁句だからね…」

だから絶対に行つちやダメだよ、と困ったような顔で言うフェイト

「？それよりティアナさんの様子がおかしくないですか？」

ティアナの行動に疑問を持つたキャロがその場にいるみんなに聞く

「私もそれがきになつとつたんや…」

「まさかスバルを巻き込んでヴィータちゃんに魔力砲を撃つつもり

じゃあ…！？」

「でも当麻の作戦なんだよね？」
「どうこつこつもり何やうつな？」

この時だけ隊長陣が全員、首を傾げるというレアな姿が見れた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3344x/>

とある魔道師と幻想殺し

2011年12月15日22時52分発行